

抱樸 かわら版DX



【2024年度報告】

2025
vol.5

もくじ

ごあいさつ	01
沿革	02
希望のまちプロジェクト	03
【特別寄稿】	06
希望のまちを諦めない	
事業紹介	10
相談事業	11
困窮者・ホームレス支援	12
子ども・家族支援	14
高齢福祉	15
居住支援	16
就労支援	18
刑務所出所者等への更生支援	18
障害福祉	19
地域共生社会創造	20
政策提言・周知活動	24
会計報告	25
応援メッセージ	26
サポートのお願い	28
法人賛助会員	28
参加のお願い	29
事業所一覧	29



12月の街頭募金の様子
抱樸では毎年夏と冬に街頭募金を行っています。街頭募金は抱樸の活動を地元の方々に直接お伝えし、困窮状態にある方々へのご支援を呼びかける大切な機会として取り組んでいます。



抱樸の由来

「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。
抱樸は原木を抱き合う人々の家。
抱樸を抱く——「抱樸」こそが、
今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。
ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。
「ここにホームがある。ここに抱樸がある」

表紙
2025年1月14日「希望のまち」起工式で行われた鉄入れの様子

裏表紙
2024年9月3日、「希望のまちを諦めない」クラウドファンディング開始の記者会見を実施しました。

2024年10月15日、まちづくりに関して連携・協力することを通じて地域社会の発展に寄与することを目指し、小倉城竹あかり実行委員会と包括連携協定を締結しました。

2025年3月13日、コロナ禍の休止期間をこえて、抱樸チャリティ「おんなじいのちコンサート」が復活しました。

ごあいさつ

2024年度も多くの方々のお支えとご参加をもって活動することができました。心より感謝申し上げます。活動の全てを詳細にご報告することはできませんが、今回も「年次報告書」を発行することができました。どうぞ、ご覧ください。

2019年秋より始まりました「希望のまちプロジェクト」は、戦争、円安、資材高騰などの影響を受け工事費が急騰し、当初予算の1.5倍を超えました。着工できない状態が長く続き、皆様にはご心配をおかけしましたが「希望のまちを諦めないクラファン」も成功し、昨年末（2024年12月）に実施した二度目の入札において、ようやく歩を進めることができました。

当初4階建てであった建物でしたが、断腸の思いで3階としました。現在、日々工事は進み、少しずつ建物の形が見え始めています。2026年秋に開所の予定です。様々な方々と「まちづくり」についての話し合いを重ねています。この間私は、現在の社会状況における「抱樸」の意味を自問してまいりました。コロナ禍においては、感染を防ぐためとは言え「他者に近寄らないことが安全だ」と考えざるを得ない日々を過ごしました。結果、以前にもまして「孤独・孤立」が深刻化したように思います。

新型コロナウイルス感染症は法的な位置づけが変わり、日常の光景としてマスクを外す人も増えましたが「他人に近寄らない」という感覚は変わっていないように感じます。世界ではウクライナ・ロシア戦争、ガザでの虐殺が止まず、分断と差別、他者否定の空気は一層強まったように思います。自国第一主義を唱え、排外主義を公然と謳う政治家が世界各地に現れています。日本でも「ファースト」という言葉が飛び交っています。

排外や分断を吹聴する人も問題ですが、なぜ、人々はそのような「極端な主張」に期待を寄せたのか。私は、そのことを考えることが大切だと思います。そこには不安、寂しさ、不満、怒りがあったのだと思います。「自分は大事にされていない」「見捨てられてきた」「将来どうなるのか」「自分は少しでもいいのちだ」と感じざるを得な

い人々に対して「ファースト」、つまり「あなたが一番」という言葉は響いたのではないかと。

極端な競争経済、不安定な雇用の増大、低賃金などが数十年に渡り放置されてきました。深刻だったのが「孤立意識」でした。抱樸は「人の生きづらさ」を「経済的困窮（ハウスレス）」のみならず「社会的孤立（ホームレス）」だと考えてきました。分断の時代にあって「この二つの課題」をどうやって解消するのか。今日の状況においては（残念ながらというべきでしょうか）抱樸のやるべきことが一層明確になったと思います。

「ファースト—あなたが一番」は魅力的なことばです。特に「自分は見捨てられた」と感じてきた人にはなおさらです。しかし「ファースト」が成り立つには「一番ではない人」、つまり「セカンド以下の人」が必要となります。差別と分断の構造に苦しめられた人が「ファースト」と言われ安心するために「二番以下の人」を必要とする。誰かを「悪者」にする。しかし、それは自分自身が苦しめられてきた差別構造を再生産しているに過ぎません。

抱樸は「あんたも、わしも、おんなじいのち」ということを活動のテーマにしてきました。ただ「おんなじ」は同質ではありません。個々人がかけがえのない「名前のある個人」であることが前提です。つまり「その人がその人として、その人らしく、他者とともに生きていく」。相互に尊厳ある人間として生きていく。それが「あんたも、わしも、おんなじいのち」ということだと私は考えます。だから「ファースト」というならば、それは「普遍的な事柄」、あるいは「普遍的価値」に対して語られなければなりません。抱樸は「いのちファースト」、「人権ファースト」、「尊厳ファースト」、そして「平和ファースト」を目指します。希望のまちは、差別や分断を乗り越える場所にしたいと思います。

今後も抱樸と共に一人ひとりが大事にされる社会づくりにご参加くださいますようによろしく願いいたします。
来年！希望のまちでお待ちしています！

奥田知志

NPO法人 抱樸 理事長 奥田知志 | Tomoshi Okuda

沿革

1988.12 「北九州越冬実行委員会」活動を開始

1990.06 「北九州越冬実行委員会」の事務局体制を整備
「北九州越冬実行委員会」の代表を守谷栄二、事務局長を奥田知志とし、活動を本格化。この年、子どもによる襲撃事件が多発し、小学校や中学校の訪問を始める。

1992.04 居宅支援開始 以後NPO発足まで50人支援

1996.01 小倉での拠点炊出し方式始まる

2000.11 「NPO法人北九州ホームレス支援機構」認証

2001.03 「自立支援住宅事業」開始

2002.07 「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」成立

2004.09 北九州市委託事業として「ホームレス自立支援センター北九州」開所
自立支援機能を拡大化。市内の500名ほどに達したホームレスがこれより減少へ。

2004.12 国税庁より「認定NPO法人」に認定される

2005.04 「自立生活サポートセンター」発足

2007.04 「抱樸館下関」開所（2017年まで）

2007.06 「ホームレス支援全国ネットワーク」発足（代表:奥田知志）

2007.07 北九州市内に餓死者が出る（「おにぎり食べたい」と書き残して餓死した事件）

2007.09 7月の事件を受け、「ホームレス支援の現場から見た北九州における不適正な保護行政に関する抗議と保護適正実施に向けた提言」を北九州市に提出

2008.09 リーマンショックが起こる

2009.02 ホームレス急増を受け、「緊急シェルター抱樸館」開所

2009.10 第1回「ゴーイングホーム・デイ」を開催

2010.05 福岡市に社会福祉法人グリーンコープが「抱樸館福岡」を開所（運営に協力）

2010.07 福岡県より「地域生活定着支援センター」を受託

2011.03 東日本大震災が発生

2011.05 東日本大震災の被災避難者支援として、「絆」プロジェクト北九州・伴走型支援事務所開設（北九州市協働）

2011.10 リーマンショック後の若年困窮者の支援として、「若年者就労支援事業」開始（2015年より就労準備支援事業として制度化）

2013.08 「生笑一座」第1回公演

2013.09 「抱樸館北九州」「デイサービスセンターほうぼく」開所
＊高齢者福祉事業を開始

2013.10 「多機能型事業所ほうぼく」開所
＊障害福祉サービス

2013.10 「子ども・家族まるごと支援事業」開始

2013.10 社会的就労事業「笑い家」開始 だし巻き玉子の製造（2018年まで）

2014.05 「互助会」発足 自立者互助組織から、地域互助組織へ

2014.07 団体名称を「NPO法人抱樸」とする

2015.04 「生活困窮者自立支援相談事業」を中間市で開始

2016.06 熊本地震が発生（ボランティアを派遣）

2017.09 「見守り支援付き住宅・プラザ抱樸」開始
＊サプリスによる「住宅確保支援」と「生活支援付家賃債務保証事業」を開始

2018.05 「ほうぼく第2作業所」（就労継続支援B型）開始

2018.11 「共同生活援助（グループホーム）」開始

2019.08 「更生保護・入口支援モデル事業」受託

2019.11 「希望のまちプロジェクト」開始

2020.04 新型コロナウイルス感染症の流行により緊急事態宣言が発令

2020.04 コロナ緊急生活支援プロジェクト
＊クラウドファンディングにより1億円達成

2021.09 「生きるための包括支援事業」開始（ライフリンクより受託）

2023.04 「重層的支援体制整備事業」開始（北九州市より受託）

2023.09 「社会福祉法人抱樸」設立

2024.01 能登半島地震が発生（ボランティアを派遣）

2024.10 小倉城竹あかり実行委員会と包括連携協定を締結

2025.01 「希望のまち」起工式・報告会、建築着工

希望のまちプロジェクト
わたしがいる あなたがいる なんとかなる



2019年11月に「希望のまちプロジェクト」を開始、計画では2024年開所を目指していましたが、物価高騰による設計・資金計画の見直し、さらには入札不落という苦難があり、着工までに5年以上の年月がかかりました。厳しい状況の中、2回目の入札に挑むことができたのは、皆様のご支援があったからに他なりません。心より御礼申し上げます。現在、着々と工事は進んでおり、2026年秋の開所を目指して準備を重ねています。

「希望のまち」
新築工事への行程



起工式同日に行った起工報告会
（北九州市立商工貿易会館ホール）



2025年9月3日の「希望のまち」建築現場

2024年5月29日

初の入札。入札額が予定価格の12億円を超えていたため入札不成立。

2024年12月12日

2回目の入札において落札。

2024年12月20日

応札いただいた建設会社と契約締結
【建設会社名】株式会社東建設（北九州市八幡東区）
【入札金額】1,425,050,000円（税込）

2025年1月14日

北九州市小倉北区神岳の「希望のまち」建築予定地にて、工事の安全とプロジェクトの成功を祈願して「起工式」を実施。



起工式ではご来賓として

北九州市 副市長	大庭千賀子様
北九州市社会福祉協議会 会長	垣迫裕俊様
小倉北区自治総連合会 会長	肝付太郎様
より、あたたかい祝辞をいただきました。	

そして、起工式の中で

希望のまちプロジェクト 代表	奥田知志
社会福祉法人抱樸 理事長	森松長生
手塚建築研究所	手塚貴晴様
	手塚由比様

株式会社東建設 代表取締役 東泰次様の5名により、《鍬入れ》を行いました。（表紙がその模様）

にわかプロジェクト

2022年春から、建築が始まるまでの間の活動として「希望のまち予定地」にて始まった「にわかプロジェクト」、2025年1月に無事「起工式」を執り行えたことで、プレハブ「SUBACO」の役割も終了いたしました。しかし地域の皆様との出会いと親交を深める活動として「にわかプロジェクト」は形を変えて続けていくことになりました！



5月

にわかマルシェ

大好評の大型マルシェ、最後の開催也大賑わいでした。

星空映画会

ハロウィン時期ということで、仮装もありで『モンスター・ホテル』を観ました。



10月

1月



起工報告会

谷本仰副理事長による祝奏、町田そのさんと奥田理事長の対談など、軽食のふるまいと共に盛りだくさんの報告会を行いました。

2月

お引越し

SUBACO撤去に向けての引っ越し。周りを憩いの空間にしてくれた庭木の数々も、工事の間預かってくださる先に運搬しました。



11月

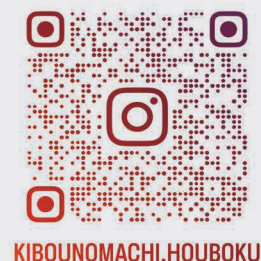
竹あかり

SUBACOでの3回目にして最後の「竹あかり」。素敵な時間でした。

「まちの先生企画」2024年度も地域の方の協力で楽しい企画をたくさん行うことが出来ました。碇 義彦さんの「スマホで写真教室」、桑名涼苑さんの「ちょっと丁寧な名前を書いてみよう!」、古島奈央子さんの「エンディングノート書き方教室」、穂坂文博さんの「ペットボトルでハンギングポットを作ろう」、中村達志さんの「ウォーキング教室」。恒例になっている栲島和子さんの「手芸クラブ」、宮下緑さんの「ダーニング教室」も賑わいました。

SUBACOで続けてきた「おしゃべりカフェ」は、抱樸の運営する支援付き住宅「プラザ抱樸」の一室で「にわかカフェ」として継続することに!希望のまちから徒歩25分のところではありますが、2025年の2月から毎月開催をしています。

また工事期間中も「希望のまち」周辺の地域清掃は続けています!



「希望のまち」の最新情報はインスタで発信中!

希望のまちを実現するために



画像提供：手塚建築研究所

● プロジェクトの実施体制

● 希望のまち応援団・寄付者

たくさんの個人および団体の方々から応援・ご支援をいただいています。

● 希望のまちプロジェクト推進本部

プロジェクト事務局 (NPO 法人抱樸)

代表：奥田知志 (NPO 法人抱樸理事長)

顧問：村木厚子 (元厚生労働事務次官)

コミュニティデザイン：山崎亮 (株式会社 studio-L 代表)

構築会議議長：稲月正 (北九州市立大学教授)

● 希望のまち推進協議会

実行団体：北九州市社会福祉協議会、高齢社会をよくする北九州女性の会、フードバンク北九州ライフアゲイン、子ども食堂ネットワーク、グリーンコープ生協ふくおか 北九州地球本部、NPO 法人抱樸

● 建築設計監修

手塚貴晴+手塚由比 (株式会社手塚建築研究所 代表)

▶ 進捗報告

2022年7月 「希望のまち推進協議会」発足
2022年10月 グランドプラン (基本計画) 発表
2023年9月 「社会福祉法人抱樸」設立
2025年1月 起工式、建築開始

▶▶ これからの進行予定

26年秋「希望のまち」開所

● 寄付額の中間報告

2022年4月から建築費用を募る寄付キャンペーンを開始。全国からたくさんのご支援をいただき2024年5月入札に臨みましたが、物価高騰により不成立に。2回目のクラウドファンディングをはじめ、更なるご支援、追加融資により、同年12月の再入札成立を経て、2025年1月、無事着工となりました。心より御礼申し上げます。

2024年12月31日時点のご寄付額 483,558,962円

(2022年ふるさと納税、2023年と2024年に実施したクラウドファンディングへのご寄付を含みます。)

現在、融資返済に加えて「希望のまち」に必要な設備、体制などを整えていくため、下記の通り、継続して「希望のまちプロジェクト」へのご寄付を受け付けています。

引き続き、応援くださいますよう、よろしくお願いいたします。

● 希望のまちへのご寄付について

希望のまちを作るには、皆さまの力が必要です。このプロジェクトは、この日本社会を照らすものになると信じています。ぜひ寄付という形でこのプロジェクトにご参加ください。

【振込の案内】 ● ゆうちょ銀行からお振込みの場合

01750-9-173501 特定非営利活動法人抱樸 (トクヒ) ホウボク

● 他行からお振込みの場合

ゆうちょ銀行 (9900) 一七九 (イチナナキュウ) 支店 当座 0173501

● クレジットカード

希望のまちの特設サイトよりご寄付いただけます。

希望のまち
▽ 特設サイト ▽



【特別寄稿】

希望のまちを諦めない

2024年9月3日から12月2日にかけて実施したクラウドファンディング「希望のまちを諦めない、抱樸をひとりにしない ― 緊急プロジェクト」では、抱樸にゆかりのある方々が希望のまちの「100人応援団」を結成し、プロジェクトに伴走してくださいました。そのお力添えもあり、5,245人の方々から、合計110,233,560円ものご寄付をお寄せいただきました。心より感謝申し上げます。ここでは、「100人応援団」の皆さまから寄せられたエッセイや応援メッセージの一部をご紹介します。

【メッセージ全文はクラファンサイトの「活動報告」からご覧いただけます】

非人情だけど親切な人

内田樹 (凱風館 館長・神戸女学院大学 名誉教授)



困っている人を助けることができる人って、どういうタイプなんだろう。

もちろん、「情に篤い人」だ。「優しい人」、「共感力の高い人」、「想像力の豊かな人」。たぶんそういうふう指折り数えることができると思う。

でも、僕はこのどれにも当てはまらない。

薄情で、気配りがなく、共感力に乏しくて、想像力が欠如している。いや、別に謙遜しているわけじゃなくて、ほんとにそうなのだ。面と向かって言われるし。

でも、僕はいろいろな支援活動に積極的にコミットしている。そもそも私財を投じて、道場と学塾を建てて、地域社会の拠点にしようとしてきた人間なんだから、うっかりして僕のことを「社会活動家」だと思っている人だっているかも知れない。

でも、もう一度言うけど、僕は「情に篤い人」じゃない。

僕には人の心の中がよくわからない。でも、「心の中」はわからないけれど、「お腹が空いた」とか「寒い」とか「痛い」とかいうことはわかる。これはリアルに、切実にわかる。それはすごくつらいだろうと思う。それについては何とかしてあげたいと思う。

僕の哲学上の師匠はエマニュエル・レヴィナスという人のんだけど、レヴィナス先生は、人間がなすべきことは「飢えた人に食事を与え、渇いた人に水を与え、宿のない人に一夜の宿を与え、裸の人に服を着せること」に尽くされ

ると書いている。「それ以上のことはしなくてよらしい」とまでは書いていないけれども、身の上話を聴くとか、トラウマ的体験を癒してあげるとか、世界に数理的秩序をもたらすとかいうことはレヴィナス先生にとっては緊急性がないらしい。

僕はレヴィナス先生の本に30代のはじめくらいに出会っただけけれども、読んでとても救われた気がした。過剰に共感と同質性を求める日本社会で、いつもいつも「ウチダ、俺の気持ちをわかってくれよ」と襟首をつかまれて涙目で懇願されていることにほんとどうんざりしていたからだ。

それからあと僕は「非人情だけれど親切な人」でいいと思ってきた。もちろん「人情に篤くてかつ親切な人」であるほうがずっといいのだけれど、あまり贅沢も言ってもらえない。

「希望のまち」プロジェクトに奥田さんから誘われたときに、とてもうれしかった。奥田さんは人間を見る目があるから、僕を一目見て、「この人、共感性ぜんぜんないな」とわかったはずである。でも、「ま、ええわ」と思った。奥田さんは徹底的にプラグマティックな人だから、この人が参加することで何人が飢えから救われ、何人が一夜の宿を得られなら問題ない、と。

僕は他人から善意を期待されると苦しい（手持ちがないから）。でも、「いい人」にならなくても、「いい人」でなくても、奥田さんの仕事を手伝うことはできる。奥田さんが日本の支援事業にもたらした最大の功績は「いい人であることは支援のための条件じゃない」という知見を教えたことだと僕は思う。



長塚洋 (映像ディレクター・映画監督)



「希望のまち」の、「希望」とはどういうことだろう。ふと思いついたことがある。

「―これは、この社会にとって希望だと思いますよ」。インタビューの最後に、奥田知志さんはそう言った。前年に刑務所から出所した男性を私がドキュメンタリー取材していた、その最終段階のこと。この男性を番組で使った仮名で以下「久さん」と呼ぶが、刑務所から出ては犯罪を起こし獄中に戻る生活を、11回も繰り返してきた。だがこの前年の出所で奥田さんたちのところに来てからは、ずっと平穩に暮らしている。それはなぜ可能だったか？という話になった時だ。

取材開始当時84歳だった仮名「久さん」は人生の半分以上を刑務所で暮らし、11回の犯行とは放火または放火未遂。そう聞けばなんと凶悪なと思われるかもしれないが、実態は出所するたび「シャバ」に居場所がなく、刑務所に戻るため犯行を繰り返したのだ。軽度の知的障害と裁判でも認められた久さんは独力で生きていくことが難しいにもかかわらず、福祉などの支えにそれまで一度もつながっていない。だから毎回出所するたび、「シャバ暮らし」は1カ月と続かなかった。だが最後の事件で奥田さんとつながり、そして抱樸や教会の人々と出会う。その後は14カ月も、犯罪に近づくことさえなく暮らし続けられたのだ(ちなみに本稿執筆時点では既に8年以上になる)。

奥田さんは振り返る。出所が迫り受け入れる前には、彼にどんな精神構造がありトラウマがあって放火を繰り返すのか、メンタルヘルスや更生保護の専門家らも交えて対応を協議したが、実際にやってみれば特別なことではなく、単純なことだった。「ほんとうに一緒にいるって事だし、声かけるって事だし、もの頼むって事だし、心配するって事だし、それを本当に細い線を、何本も何本もつなぎ止める中で、この1年が過ぎていった」。そのあと奥田さんは続けたのだ、「これはこの社会にとって希望だと思いますよ」。

特別なことをしなくてもひとが立ち直る、そうした「希望」はどう可能なのか？インタビューで「何本もの細い線」と奥田さんは表現した。「一本の太い糸よりも百本の細い糸」は、奥田さんが講演や教会の説教でたびたび使う表現だ。

どんなに太い糸でも1本や2本では、それが切れたら落ちてしまう。でも細くても何本もあれば、いくつか切れてももう落ちない。支援の極意のたとえである。私自身も他の取材で、私こそがオンリーワンの支援者と自負するひとが意気込む余り関係作りで躓く姿に、何度か出会ったことがある。

奥田さんにしても絶望の淵にあるひとを連れてくるとき、最初は自身が太い一本の糸なのだろう。久さんの場合も、奥田さんが一人で受け入れを決めたという。出所直後、何週間かは奥田家で過ごさせるが奥田さん本人は全国を飛び回って北九州に居ること自体少なく、妻の奥田伴子さんがかなり消耗しながら久さんをケアするお姿を近くで拝見した。だがやがて久さんは教会の人々と交流して幼な子と親しみ、隣の抱樸館で暮らす元野宿者たちと友人付き合いが始まり、併設のデイサービスで仲間と過ごし、そして抱樸のボランティア活動を楽しげに手伝うようになる。過去10回の出所では頼れる「糸」に出会わなかった久さんが、いわば最初の糸から次の糸へ、そして多数の糸へとつながっていった。

でも2番手の大糸となった伴子さんも、そのあと100本の糸となった抱樸や教会の人々も、漫然とつながったわけじゃない。「久さん」には何が良いのか、別の人物には何が良いのか、一つ一つに真剣な試行錯誤があったはずだ。

たとえば―縁起でもないと言われそうだが、今後もし奥田さんが倒れたら？ 苦しむひとを最初に「引き上げる」糸として奥田知志というひとの個人的資質は確固たるものだと思うが、そこに依存して「希望」は続くのかどうか。

100本の糸の力、その試行錯誤もすべて蓄積し集大成して、つまりはコミュニティそのものとして恒久化することが「希望のまち」という構想なのではと、勝手に理解している。

「これは希望だと思いますよ」。その希望が永続的に生まれる場。今は93歳となった「久さん」の人なつつこい笑顔姿を、希望のまちの真ん中で私は撮りたい。そのときは皆さん、よろしくお願いします。

コラム1

ホームレスとハウスレスは違う

私たちは「ホームレス（社会的孤立）」と「ハウスレス（経済的困窮）」は異なる状況だと考えています。「この人には何が必要か？」と「この人には誰が必要か？」の両面を考えます。以前、中学生から襲撃を受けていたホームレスの方がこんなことを言っていました。「あの中学生は、家（ハ

ウス）はあっても居場所（ホーム）、心配してくれる人がいない。心配してくれる人がいない者の気持ちは、俺は（ホームレスだから）わかるなあ」。その言葉で、私たちはハウスレスとホームレスは違う、ホームレスは路上生活者に限らないことに気づかされました。

**村木厚子**（全国社会福祉協議会 会長・元厚生労働事務次官）

生活困窮者自立支援法をつくる時に教えてもらいました。「困窮している人には、2つの共通点がある。一つは複数の困難が重なっていること、もう一つは社会とのつながりが切れていることだ」。この言葉に、縦割りの制度だけでは問題は解決しないこと、社会とのつながりがないと人は支援につながりにくいことを教えてもらいました。

「希望のまちプロジェクト」はそんな問題意識を背景に生まれた実験プロジェクトです。誰もが集い、互いにつながることができ、そして必要な支援につながることでできる新しい形の地域の拠点づくりです。どうか、皆様のお力をお貸しください。

永井玲衣（哲学者・作家）

希望は、深い暗闇の中で、もう立ち上がれないと思った中で、わずかにさしてくる光だ。わたしたちはこれを集め、大きな光にしていけることができる。いや、そう信じようとするのが希望そのものでもある。希望のまちは、わたしたちのための光のまちだ。しょうがないとカッコつける前に、まずは希望の話をしよう。希望のまちをはじめよう。

**後藤正文**（ミュージシャン）

必ず手を差し伸べてくれる場所があることの心強さ。希望のまちがあると考えるだけで、僕は失敗を恐れずに生きて行けます。どうか実現しますように。

玉川奈々福（浪曲師）

安心できる場所。眠れる場所。集える場所。いていい場所。社会的立場において区別差別されることなく。そんな場があってほしい。作ってほしい。だから応援します。

**寺尾紗穂**（音楽家・文筆家）

奥田さんの続けてこられた誠実な活動は、「草の根」の想いを集結させるエネルギーに満ちており、そのことにいつも希望を頂いています。

コムアイ（アーティスト）

日本全体が、自己責任！明日は我が身！と唱えて、助け合わない社会に向かっていく。それに逆らって風を吹かそうとする人たちも少なからずいる。私はそちら側に立ちたい。希望のまちに希望を託して。

**杉山春**（ルポライター）

いつか奥田さんと電車で一緒にした時、ある刑に服している方について「もったいない」と仰ったことがずっと心に残っている。明るさも、人を思いやる心も、生きる熱意も持っているのに、うまく生きられなくなった時、助けを呼べなかった。信頼すること、希望を持つこと、愛すること。それが形になる場所として「希望のまちプロジェクト」を応援します。

**若松英輔**（批評家・随筆家）

人は誰もが、危機に瀕する可能性があります。「希望のまち」は、限られた人のための場所ではなく、すべての人に開かれた安息と回復の地だと思います。生き抜くことだけでも大きな労苦となる現代における希望の灯火になることを心から祈りつつ、この試みに賛同します。

入江杏（ケアミーツアート研究所）

「怖いまち」から「希望のまち」へ。「怖い」犯罪被害に巻き込まれ、苦しんだわたし。非日常の悲しみと苦しみの体験から、「悲しんでいい、十分にあなたらしく」と呼びかけています。悲しみと恐怖を希望に変えたい。100人の応援団として携わることが嬉しいです。

神谷祐紀子（ケアミーツアート研究所）

他者とごく自然につながることを許される「居場所」——そんな居場所に溢れる地域は、希望に満ちた「まち」となることでしょう。よろしくお願いします。



撮影：川島彩水

**鈴木晶子**（認定NPO法人フリースペースたまりば 事務局長・理事）

希望のまちのことを初めて聞いた時、いつかこれが私のまちにもできてほしい！そう思って応援を始めました。希望のまちは誰でも暮らすことができます。手を差し伸べてくれる支援員も、子どもからホームレスだったおっちゃんまで、誰もが誰かの支え手になり、希望になって、共に暮らせるまち。そんな希望のまちが全国に広がっていくには、最初の1箇所を成功させなければなりません。希望のまちから、希望の国へ。ぜひみんなで実現させましょう！

鬼丸昌也（認定NPO法人テラ・ルネッサンス 創設者・理事）

「希望のまち」は、北九州だけではなく、どこのだれにとっても「希望のまち」になる。このモデルが全国に広がることで、誰もが取り残されない社会を再創造する契機になるはず。その願いをもって「希望のまち」構想を応援し続けます。

**北山雅和**（グラフィックデザイナー）

この鬱屈とした世界に「希望」を掲げる抱樸。愛とバイタリティ溢れる行動力にはいつも強く心を揺さぶられてきました。ロゴ制作という形で、こんな愛と希望に溢れたプロジェクトにご一緒できてとても光栄です。ぜひ「希望」が立ち上がる姿を目撃したい。応援しています。

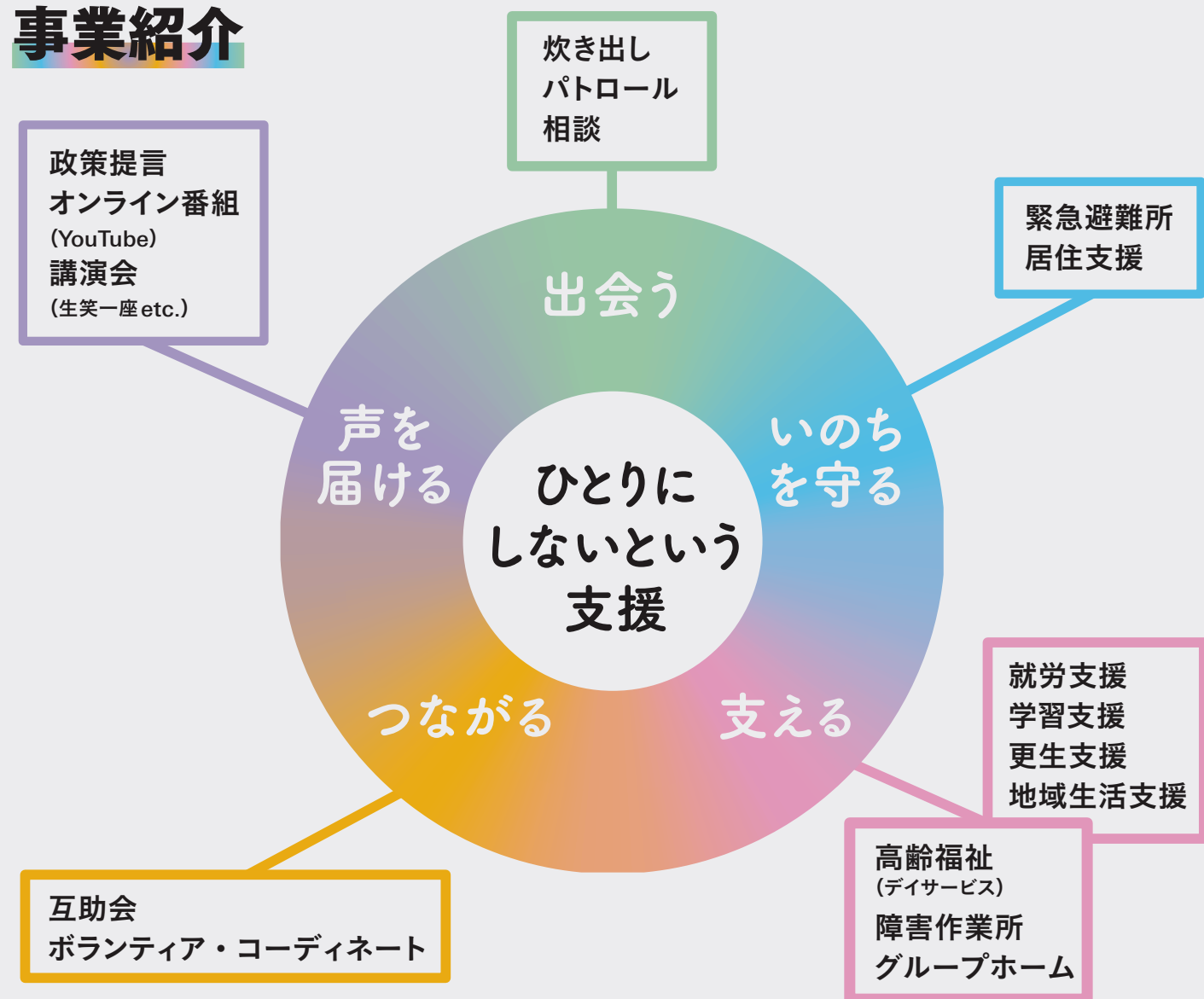
太田光海（映像作家・人類学者）

現代社会では、ほんの僅かな人たちがお金を儲けるためだけに、一部の性質や能力をあたかも「人間として優れている」証として評価することで、それに当てはまらないかけがえのない人たちを見捨てるようにできている。抱樸は、そんな世界に希望の光を灯すために身を削って色々な取り組みをしている。ちっぽけな存在なりに、その取り組みが絶対に実を結ぶように応援したい。

**eri**（デザイナー／アクティビスト）

“たすけあう”という心を健やかに持つことが難しくなってきたこの世界で、“たすけあう”を支柱につくられる希望のまちは、すべての人にとっての“希望”になると信じてます。私もたすけたいと手を差し伸べることでできるひとでありたいし、たすけてもらえるという安心感がほしいから、希望のまちを応援しています

事業紹介



数字でわかる抱樸

2025年3月末日現在

37年 抱樸は1988年から活動を行なっています	3,802人 抱樸の居住支援を受けて 家に住めるようになった人数	1,003人 地域生活サポートの対象者数
2,725人 ボランティアとして登録している人数	162,283食 炊き出しで配ったお弁当の数	154,349件 生活困窮者からの相談の数
185人 これまでに支援した子どもの人数	12件 厚生労働省など省庁の政策立案や 審議会に参加した数	29事業 子どもから大人まで包括的な支援

相談事業



生活のお困りごとや心配など、まずはお話をお聞きます

ひとりで悩んでいてもなかなか先が見えない。そのようなときに相談できるところがあれば、次に進む勇気が持てたり、自身の気づかなかった可能性が見えてくることがあります。誰かに話を聞いてもらうだけでも違うものです。相談に来る方のお話やお気持ちを聞きながら、複雑に絡み合った困りごとを紐解き、今後のことを一緒に考えます。

◎ ホームレス自立支援センター北九州

・巡回相談（北九州市委託事業）

生活に困窮した方の全般的な相談にのっています。ご本人からだけでなく、弁護士や警察、病院、一般の市民の方からも「〇〇さんの相談にのってほしい」と依頼があります。また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。

・火曜相談会

毎週火曜日に開催している相談会。決まった時間・決まった場所に相談できる先があることで助かる人が大勢います。
*2024年度：相談件数 201件

・法律相談会

ホームレス・困窮者支援に協力していただける弁護士・司法書士・社会保険労務士のグループ「法律家の会」メンバーが、毎月1回の法律相談会を開催しています。

◎ 重層的支援体制整備事業

社会福祉法の改正に伴い重層的支援体制整備事業が誕生し、北九州市では2023年8月から事業を開始しました。当法人では、北九州市から①継続的に支援を届ける伴走型支援事業、②社会との接点をつくる参加支援事業、を受託しています。2024年度は、門司区、八幡東区、八幡西区、戸畑区で実施し13世帯に関わりました。色んな方の「こうしたい、ああしたい」という気持ちを叶えていくことのお手伝いをしています。北九州市における包括的な支援体制の構築に向けて、この事業を通じて行政や関係機関が連携しやすい体制をつくっていきけるように、関係者と対話をしながら試行錯誤しています。



◎ 中間市市民生活相談センター

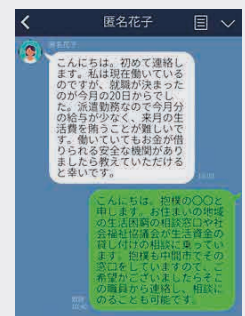
生活に困っている方の相談事業として、中間市からの委託事業「市民生活相談センター」を運営しました。
*2024年度：相談件数 401件（内新規136件）

◎ 生きるための包括支援事業・つなぎ支援（ライフリンク委託事業）

2021年度から開始した自殺対策事業です。自殺を考えている人のお話を聞き、切迫性や緊急度が高い方に対して、継続的な架電や必要の場合は福祉的資源につなぐといった支援を行っています。

◎ LINE相談

生活の相談は、お電話やメールだけでなく、LINEでの相談も受け付けています。



▶ 困窮者・ホームレス支援



自立が孤立に終わらないために

社会に居場所がない。困っているのに、「助けて」と言える誰かがいない。生きることに疲れ果て、自分が困っていることにさえ気づけない。私たちの周りには見えるところにも、そして見えないところにも多くの孤立と困窮があります。

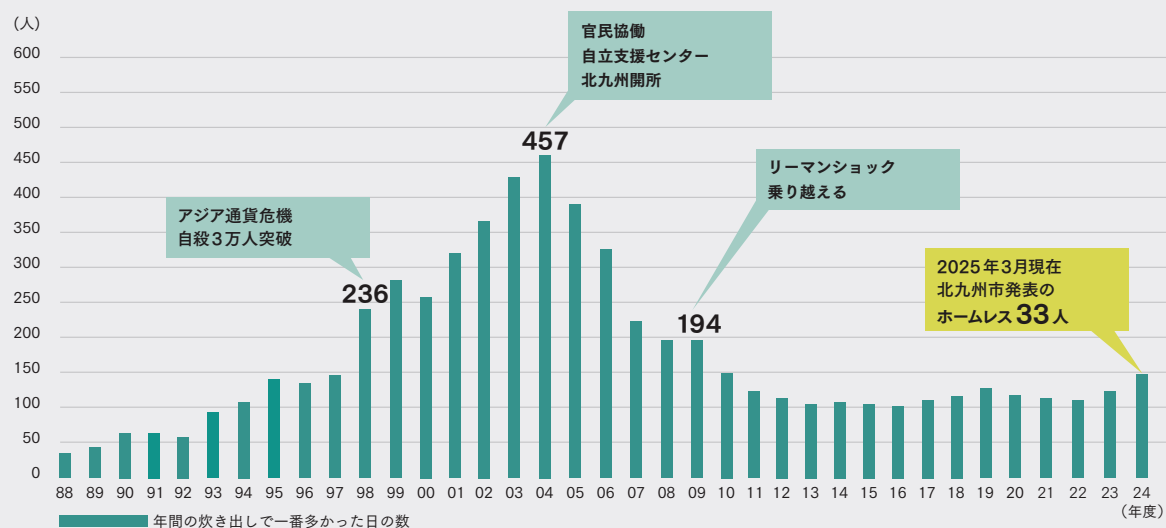
抱樸は社会から「自己責任」と言われ疎外されてしまった方々に寄り添い、次のステップへ進むための伴走を行なっています。それは、本人や家族ばかりに責任を求める社会の風潮のなかで、赤の他人も含めて「助けて」と言える社会をつくるための活動です。

● 炊き出し・パトロール

北九州市小倉北区の勝山公園で、年間30数回の炊き出しをしています。炊き出しの後は、北九州市内・下関の7方面に分かれて、炊き出し会場に来られなかった方を訪ねるパトロールを行なっています。お渡しするお弁当は、炊き出し協力団体(※)のボランティアの皆様が準備したもので、お配りする衣類は全国から寄付で集まったものです。炊き出しはいのちを守る活動であり、「これからの相談」につながる出会いの場でもあります。

※炊き出し協力団体：カトリック黒崎教会／カトリック水巻教会／カトリック小倉教会／カトリック戸畑教会／カトリック湯川教会／日本バプテスト連盟枝光キリスト教会／若松バプテスト教会／日本バプテスト連盟東八幡教会／日本キリスト教団若松浜ノ町教会／日本キリスト教団東篠崎教会／聖小崎ホーム／ファミリーホームやまだホーム／下関グループ／立正佼成会小倉教会／にじ屋（順不同）

炊き出しで出会った人数の推移



※2024年4月～2025年3月 炊き出し回数31回のべ人数3575名 平均115.3名／回



全国の皆様から寄せられたお手紙をつけたお弁当をお渡します

● ホームレス自立支援センター北九州

主に就職を目指す方の支援施設として、北九州市から「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を委託されています。2004年9月にスタートし、これまでに1,500人を超える方が利用。ハローワークとの連携により、多くの方が仕事を見つけて施設を出発していきました。求職だけでなく、自動車免許などの資格取得も支援しています。



● 自立支援住宅

2001年、北九州ではじめての自立支援の仕組みが自立支援住宅です。ホームレス状態からそのまま入居できる「家」を準備し、複数のボランティア担当者が伴走しながら、地域への出発を支えます。自立が孤立に終わってはならないとの思いから、担当者とのつながりは入居者が自立支援住宅を出た後も続き、お見舞いや誕生日のお祝い、そして看取りまで行ないます。

※2001年5月以降のべ217名の方が新しい生活へと出発しました。



● 緊急シェルター抱樸館

路上生活は大変過酷で、いのちに関わります。路上生活をする方が減少している現在でも、年に数名は路上で逝去、または緊急搬送先の病院で治療が間に合わず亡くなるという現実がこの日本にあります。わたしたちは北九州市内にシェルターを準備し、緊急避難のための場所を確保しています。



ボランティアの声

上正喜さん（互助会）



抱樸館北九州の近所に住んでいます。抱樸館では将棋を指せると知ったのがきっかけで、定期的に顔を出すようになりました。一人暮らしなのでいろいろな人と会話できるのは楽しいです。抱樸館に集う人達はみんな個性豊かで面白いですね。抱樸館に通ううちに知り合いも増え、今ではすっかり自分の居場所になりました。互助会のみんなでバス旅行にいったのはいい思い出です。年齢的に身体を動かすボランティアはきついですが、自分のできる方法で抱樸の活動を少しでも支えたいと思っています。

▶ 子ども・家族支援



子どもの困窮は「家族の困窮」

相談を受けるなかで、「幼少期に学校に行けなかった」「昔から家に居場所がなかった」という話をよく聞きます。子供時代の経験は、その後の人生を大きく左右するものです。しかし、「子どもの貧困」が約9人に1人ともいわれ、貧困が親から子に連鎖している現在の状況では、親の責任を求めたところで問題は解決しません。

抱樸はこの困窮の連鎖を断ち切るため、2013年から子どものいる困窮世帯や社会的孤立状態にある世帯の支援事業を行っています。子どもへの学習支援を中心にしながら、その家族に対しても包括的かつ持続的な支援をしています。

学習支援

◎ 集合型学習「スイトレ」

2013年から、子どもたちへの学習支援をスタートさせました。学校や家庭の環境といったさまざまな事情により勉強したくてもできない状況に置かれてしまう子どもたちの学習支援を無料で行なっています。集合型の学習支援「スイトレ」では、大学生や社会人のボランティアにも協力してもらいながら、宿題や受験勉強のお手伝いをしています。このスイトレは、多くの子たちにとって親や家族以外の大人と話せる場所、安心できる放課後の居場所にもなっています。



◎ 訪問型学習支援

さまざまな事情から集合型の学習支援に出てこれられないような子どもたちには、家庭訪問による学習支援も行なっています。訪問を続けていると、子どもだけでなく親との関係も作られていくので、家庭全体の生活支援につながることも多々あります。ママやパパから医療や体調、生活、学校、お仕事や医療、介護の悩みなどを聞き、私たちにできることはないか、一緒に考えます。なかには、引っ越しのお手伝いをすることもありました。

◎ 社会参加

子ども時代から色々な人や物事に触れることで、人生の選択肢が広がるのではないかと。子ども時代に「誰かから大切にされた」という経験を持つことで、自分のことを大切に思い、そして誰かのことも大切に思える人になるのではないかと。そのようなことを考えながら、私たちは子どもたちが家庭や学校だけではない「社会」に触れるためのプログラムやレクリエーションも行なっています。一緒に釣りや海水浴に行ってみたり、クリスマスや夏祭りなど季節のイベントを行ったりもしています。



◎ よるかふえ

安心できる居場所として「よるかふえ」を開催しています。コロナ感染防止対策で休止していましたが、2024年度から再開しました。今は特に高校を卒業して一人暮らしをしている若者たちが楽しみにして集っています。



◎ その他の生活支援

私たちの支援は学習だけに限りません。家族と学校との関係のご相談に乗ったり、必要があれば求職や医療、介護的な相談を受けたり、ただ話を聞いたり。そのようなつながりを持つなかで、子どもも親も幸せを感じられるようにお手伝いします。また、子どもたちが成長しても、そこで支援が終わり、というわけではありません。大人になった彼・彼女らに対し、「困った時にいつでも助けを求められる場所」として残っていくためにも、少ないスタッフ数ではありますが奮闘の日々を送っています。小学校・中学校の卒業式にスタッフが参加したり、高校合格発表に付き添うなど、喜びを共有しました。

＊2024年度対象者人数 子ども183名とその家族

▶ 高齢福祉



支援は「出会い」から「看取り」まで

私たちは、出会いから看取りまでの支援をします。住み慣れた地域で安心してその人らしく生活できるように、介護事業も行なっています。

◎ デイサービスセンター デイサービスセンター（地域密着型通所介護）を運営し、高齢者の生活支援を行なっています。＊2024年度は15名の方が登録され、1日平均7.21人の方が通っています。

▶▶▶ 1日の流れ

- 9:00：送迎
- 10:00：利用開始、バイタルチェック、入浴、アクティビティ、機能訓練（体操など）
- 11:00：嚥下体操（飲み込み訓練）
- 12:00：昼食
- 13:00：アクティビティ（塗り絵、トランプ、誕生日会など）、機能訓練（体操など）
- 15:00：おやつ
- 15:30：利用終了、送迎



屋外レクにて、金比羅公園に花見に行きました

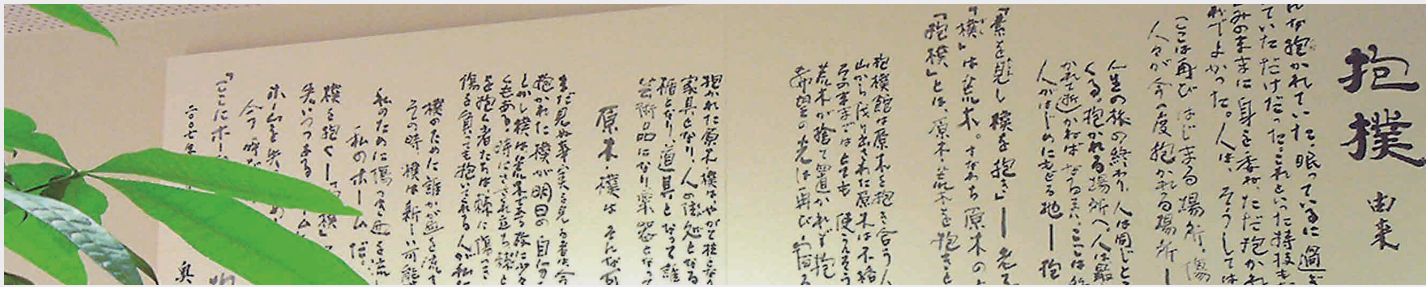


毎月、ボランティアの先生に来ていただき、書道教室を行っています。



9月に開催される八幡東区年長者作品展に出展しています

▶ 居住支援



「家」から始まる生活の基盤づくり

住居を失うということは、第一に「生存的危機」、第二に「社会的危機」、そして第三に「孤立の危機」を意味します。住居を失い、路上生活になるという事態はすぐさま生命の危険を意味します。また、あらゆる行政手続は現住所地での手続き（申請）となります。住居を失うとすべての社会的手続きができなくなります。さらには、人は一定の場所に暮らすことで地域社会への参加の基礎を築きます。これらの意味で、住居を確保することは何よりも優先される課題（ハウジング・ファースト）であると言えます。

「居住支援」とは、建物（ハコ）を含む総合的概念であり、「子どもを育て、客を招き、社会活動を行ない、生活していくこと」を支えるものです。相談、住宅確保、保証人確保及び社会的手続き支援、生活支援、見守り支援、孤立防止と社会や地域への参加支援、葬儀を含む死後事務など、本人の生活（人生）全般にかかわる支援です。

● 抱樸館北九州

「抱樸館北九州」は、多くの方々の寄付によって建てた入居施設です（2013年9月オープン）。路上生活を脱出し自立した人たちのなかには、障害や金銭面などさまざまな生きづらさを抱えるために、どうしても地域生活に馴染めず、施設入所も難しい人たちがいます。そんな方たちを迎える場所が必要でした。

「ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所」。1階にあるレストランには、「抱樸由来」と題した大きな額が掲げられています。

【施設概要】

- ・1階 レストラン、デイサービスセンター
- ・2～3階 完全個室の居住スペース（30室）、入浴施設
- ・24時間のスタッフ配置

*2024年度 入居者数29名（2025年3月末）新入居2名 退去2名
2020年10月1日より、日常生活支援住居施設（※）に認定（北九州市認定）



※ 生活に困っている方向けに家賃を低く抑えた無料低額宿泊施設のうち、面積や耐震・耐火性能など一定基準を満たした施設に対して、行政が生活支援のためのスタッフ人件費を助成する制度が2020年10月1日から始まりました。抱樸は、制度開始当初からこの認定を受けています。

◎ 見守り支援付き住宅

（プラザ抱樸／グループホームほうぼく）

2017年9月からスタートした見守り支援付き住宅（プラザ抱樸）は、単身生活が可能であるものの何かあったときのための見守りや、時として生活支援が必要な方に対して、住まいと生活支援、家賃の保証を組み合わせた「持続可能な居住提供」を実現するモデルです。2021年6月からは20室を「日常生活支援住居施設」（生活保護法に基づく制度事業）として運営を開始したことで、より手厚い支援が可能となりました。

見守り支援付き住宅と日常生活支援住居施設、さらにはグループホーム（共同生活援助）を組み込むことで、支援ニーズに応じた「断らない支援」が可能となっています。

2024年2月からは、希望のまち着工にともない、現地の交流拠点だった「希望のSUBACO」にて開催していた「にわかフェ」をプラザにて開催しており、抱樸としての居住支援のあり方をこれからも模索していきます

【物件内容】

小倉北区（12階建てマンション）全室リフォーム済み、トイレ・浴室別



*2024年度入居者数 75世帯（2025年3月末）＋グループホーム10名（2025年3月末）

グループホーム入居者の声

東郷鷹志さん

抱樸の就労準備支援事業の紹介で、3年前にグループホームに入居しました。就労準備で教わったパソコンのスキルを活かして、今は小倉のB型作業所に通っています。昔から、病気がちで、何度か入退院を繰り返してきましたが、GHの職員さんが着替えを持ってきてくれたり、部屋の片づけを手伝ってくれたり、親身になって寄り添ってくれたのでとても助かりました。昔に比べて、人とのコミュニケーションも上手くとれるようになりました。今後は自分のペースで働きながら、一般就労（障害者雇用）を目指して頑張りたいです。



料理は苦手でしたが、職員さんと一緒に餃子やお好み焼きづくりにも挑戦しました。

◎ 「自立支援居宅協力者の会」による入居マッチング

不動産事業者がNPOと連携し住居喪失者の居住支援を実施するための組織で、現在、福岡県内50社を超える不動産事業者が加入しています。「自立支援居宅協力者の会」の加盟企業が賃貸物件を紹介してくれるおかげで、北九州の活動での住宅確保が進んでいます。会の主な働きとして、①不動産物件の紹介、②入居後の見守り、③家賃滞納などの早期発見とNPOへの連絡、④退去や死去時の残置物処分などに関する協働を行ないます。

◎ 賃貸借契約時の保証人の提供

私たちは「住みたい」と「貸したい」を橋渡しするために、賃貸借契約を結ぶ際に家賃債務保証を提供しています。提供するものは「保証」と「暮らしの安心」です。

さらには、債務保証会社による家賃債務保証と抱樸の生活支援を組み合わせた「断らない家賃保証」サービスの提供も開始しました。ビジネスを組み合わせ、いのちを支えます。

▶ 就労支援



仕事に向かうための土台づくり

私たちは「仕事」全般にかかわる支援に取り組んでいます。「仕事」は、稼ぐ・生きるための手段だけではありません。生きがいや誰かに必要とされることの幸せも、「仕事」のなかにはあります。

◎ 就労準備支援事業（中間市・北九州市受託）

さまざまな課題を抱え、すぐに仕事をするのが難しい方と一緒に悩み、考え、状況に応じた支援を行なっています。多様な研修や協力企業での就労体験を通して、本人にあった就労を目指します。

＊2024年度〈北九州市：研修生47名、中間市：研修生2名〉

◎ 技能講習（厚生労働省受託事業）

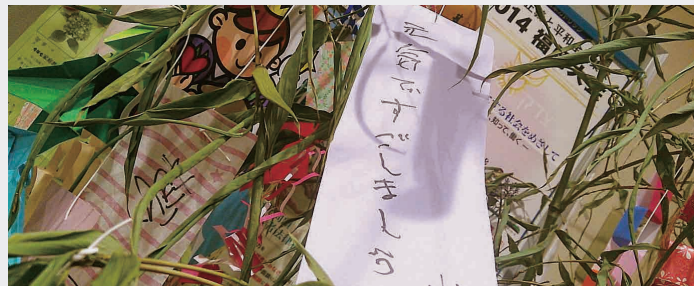
運転免許など免許の取得や技能の習得を支援することで、就職の可能性を広げるお手伝いをしています。

＊2024年度：受講数117件

◎ 無料職業紹介

無料職業紹介事業所の許可を受けて、働き手を求める企業と働きたい人をマッチングさせる支援をしています。

▶ 刑務所出所者等への更生支援



誰もがやりなおせる社会へ

抱樸は刑務所から出所した方への支援も行っています。出所しても家や仕事探しなど、さまざまな面で家族や知人の支援がないと生活の再建は困難です。刑務所にしか居場所がないような孤立した方を生み出さないための支援が必要です。

◎ 地域生活定着支援センター

高齢・障害などの困難により生活苦に陥り、犯罪に走ってしまう方がいます。たとえば、全国にある48ヶ所の地域生活定着支援センターには、高齢・障害などの課題を抱える方から、年間約1,600件の支援依頼が来ています。

◎ 入口支援の取り組み

2021年度から地域生活定着支援センターの業務に、「被疑者等支援業務」が追加されました。刑事司法手続きの入口段階にある被疑者・被告人等のうち、福祉的な支援を必要とする方に対し、釈放後安心して生活できるよう支援をします。

＊2024度：新規相談105名（うち出口支援61名、入口支援44名）

コラム2

自己責任と出会った責任

現代において「自己責任」という言葉は、「出会った責任を回避する」言葉として使われているように思います。「それはあなた自身の問題だ」と言い切ることで、「その人を助けなくてもよい」と言い放つ社会（「自己責任論社会」）になってしまっているようです。しかし、私たちはやはり「出会い」には責任があると考えています。「出会い」は時に深刻で、時に豊かな影響を私たちにもたらします。

そして、人は一度出会ってしまうと、どれだけ忘れようと思ったとしても、決してそれを「なかったこと」にはできないのです。もちろん出会いから生じたすべての責任を「とる」ことは私たちにはできません。しかし、出会った責任は「ある」のだから。そう思い続けることで抱樸の活動は36年間続いてきました。

▶ 障害福祉



撮影：高村吉祥丸

一人ひとりに役割と居場所のある生活を

抱樸は、就労継続支援B型と生活訓練の事業所を運営してきました。

ホームレスや生活困窮状況に陥る方のなかには、さまざまな生きづらさを抱えている方がいます。そのひとつが障害です。生きづらさがあっても役割を見出し、その人らしく生き生きと能力を発揮してもらいたい。障害のある方の仕事づくり、生きがい、居場所づくりのために就労継続支援事業を行っています。

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）：2024年度登録者数 30名（B型29名、生活訓練1名）（一日平均利用 20名）＊2025年8月1日より「ほうぼく第1作業所」に名称変更

ほうぼく第2作業所：2024年度登録者数 35名（平均利用 23名）

【2024年度 作業内容】

- ・高齢者施設やマンションの清掃
- ・ウエス加工
- ・箱折りなどの施設内作業
- ・自主製品やお菓子の製造・販売
- ・自動車部品の研磨・検品
- ・農作業と収穫物を用いた製品づくり



小倉南区の農園を借りて色んな野菜を作っています

ほうぼくストア

<https://npovol.stores.jp>

作業所でつくった「まごころ製品」を通販しています。売上は利用者さんの工賃になります。ぜひご覧ください。



抱樸の人気キャラクターほうぼくん（完売御礼）



手編みのコースター



フェルトボールのしおり



フェルトボールのフラワー

コラム3 伴走型支援とはなにか？

「伴走型支援」とは、抱樸が提唱する支援のあり方です。これは深刻化する社会的孤立に対応するために、「つながり続ける」ことを目的とした支援として生まれました。その人が直面している経済的困窮や住まい・健康上の課題などを解決する「問題解決型支援」は不可欠です。しかし、問題解決型支援が行き過ぎると、「解決できたか、できないか」という「成果主義」に陥る危険性があります。伴走型支援は「解決」という結果ではなく、「つながり」という状態を重視します。どんな結果になるのであれ、「生きてつながっていること」に最大の価値を見出します。決して「ひとりにしない」こと。それが私たちの支援の根幹にある想いです。



▶ 地域共生社会創造



誰もが互いに助け合える仕組みを

私たちは、支援の専門性を高めると同時に、市民参加型の「社会づくり」を目指しています。地域の隣人としての見守りや助け合いが、「孤立」を生まないための何よりの力になるからです。出会いから看取りまで。「ホーム」を失った方たちとともに生き、支援／被支援の関係性を超え、「お互いさまの社会」を実現させるために、抱樸をプラットフォームにして、たくさんの「出会い」や「交流」の機会をつくりたいと願っています。

◎ 地域生活支援（自立生活サポートセンター）

抱樸での支援を受け、地域での生活を再開した方々の見守りおよび生活全般の支援を行っています。再野宿化や孤立化を防ぐためには、いつでも気軽に相談できる場所が必要です。

支援内容は、病院への付き添いや買い物の同行、引っ越しのお手伝いなど多岐にわたります。

日々の生活で生じる困りごとの相談をお聞きし、必要な機関や人とつながだけでなく、共に地域で生活する人間として、互いに尊重しながら支えあう関係を地域に構築することが目標です。



① 就労支援・定着支援

② 住居支援

③ 福祉事務所等との連携による支援

④ 健康・保健支援

⑤ 親族・地域との交流支援

⑥ 福祉制度等活用による支援

⑦ 法律・人権支援その他

⑧ 定期訪問

⑨ 互助会連携

⑩ 看取り等支援

⑪ 金銭管理支援



引っ越しのお手伝い



安否確認訪問



葬儀の支援

*2024年度実績：支援件数のべ17,366件 支援人数のべ6,211名

◎ ボランティア

抱樸にとって欠かせないのが、ボランティアの存在です。実際に私たちの活動はすべて、ボランティアから始まっています。また、地域共生社会を実現するうえでも、ボランティア活動への参加はとても大切なことだと考えています。

ボランティアで行なう活動は各「委員会」が企画し、活動のコーディネートは抱樸のなかに設置した「ボランティア事務局」が担当しています。（ボランティア活動にご興味のある方は、P29をご覧ください）

◎ 委員会が主導する活動、③つの柱

① 炊き出し

コロナ禍以降、休止していた食事コーナーを2023年度末によりやく再開して迎えた2024年度。お弁当を食べたり、お茶を飲んだりしながら他愛のない会話を交わすいつもの光景が戻ってきました。物価高が影を落とし、「この1食ありがたいんよ」と炊き出しに並ぶ方がじわじわと増え、お配りするお弁当数は2023年度1回平均107食から2024年度は115食となりました。炊き出しは出会いの場。ともに過ごす時間を重ね「助けて」の声を受け止める関係性づくりの大切さを再認識した1年でした。



② 自立支援住宅

住まいを失い、「助けて」といえる関係性を失った方を抱樸館北九州に迎え、ボランティアが伴走支援する取り組み。入居希望者との面談から入居式をへて、必要な福祉サービスや医療へのつなぎ等を行いながら、つながりを重ね「ホーム」になることを目指します。新しい生活の準備が整うと、ボランティアや抱樸館北九州のみんなに囲まれて出発式です。2024年度は出発式、入居式を各1回行いました。格別なひとときでした。



③ 自立後サポート

① お見舞いボランティア

施設や病院におられる方々を定期訪問するボランティア活動。地域生活支援部門と連携しながら、2024年度は計4名の方をお訪ねすることができました。



①

② 誕生日カードのお届け

抱樸が支援に関わった方々へ、月ごとに誕生日カードを作成、寄せ書きし、お送りしています。2024年度は12か月計688通を発送しました。



②

③ なごみカフェ運営

抱樸館北九州のレストランで毎月第1水曜日に「互助会」活動としてどなたも参加できる交流会「なごみカフェ」を運営。2023年度は月1回だけでしたが、2024年度は月2回に増やし、計23回開きました。このうち奇数月にはプチバザーも行い、にぎわいました。



③

「希望のまち」の地元で初のゴーイングホーム・デイ

ゴーイングホーム・デイ（以下GHD）は、抱樸に集うみんなの「大運動会」です。《なんちゃって家族》《大きな家族》を目指す活動の中で、奥田理事長が「家族といえば運動会!」とひらめいたことから2009年に始まりました。2024年度は「希望のまち」地元の中学校体育館で初めて開催しました。地域の子どもさんたちが特別ゲストとして「小倉祇園太鼓」を披露くださり、参加者みんな感無量でした。

◎ 互助会

月500円の会費で、誰でも参加可能な互助グループです。

出発点となったのは、路上から自立した後、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送りたいと考えた、自立者のみなさんがつくった「なかまの会」です。助けられたり、助けたり——そんなつながりが地域に広がればと、なかまの会を土台に、「互助会」ができました。互助会は「人はひとりでは生きられない」を基本に、3つの精神を大切に活動しています。

- ① 「なかま」——仲間をつくる、仲間になる
- ② 「お互いさま」——助けられたり助けたり
- ③ 「ふるさと」——助けて、と言える居場所をつくる

互助会は「共に生きる地域社会の創造」を行なうための事業であり、地域に開かれた大きな家（ホーム）です。誰もが「なかま」。いつでも、どなたでも歓迎します。

※互助会のなかには、野宿の経験を分かち合える当事者グループ「なかまの会」もあります。

【活動内容】

① 互助会レター

行事カレンダーやその月に誕生日がある会員の紹介など、会員交流のための「互助会レター」を毎月発行しています。安否確認もかねて、一人暮らしの方には、なるべく手渡しでお届けしています。遠方の方には郵送でお届けします。

② 誕生日会

2024年度は毎月第3水曜に抱樸館北九州のレストランで開催し、みなさんの誕生日を祝いました。隣接するデイサービスセンター抱樸のみなさんも一緒に参加くださっています。

③ 炊き出しのための衣類物資仕分け作業と地域清掃

金曜日の午前9時30分に集まり、炊き出しのある金曜日は仕分け作業を中心に行います。清掃活動は天候に応じて、無理のないよう実施しました。

※2024年度：仕分け作業31回実施

④ お祝い金・お見舞金

長寿やご結婚のお祝い、また入院お見舞いも出しています。

金額はささやかでも、その方のことをみんなで思います。

※2024年度 卒寿（90歳）1名、米寿（88歳）2名、傘寿（80歳）5名、喜寿（77歳）8名、古希（70歳）3名

⑤ イベント

コロナ禍で休止となった活動の中で、再開に踏み切れなかった「バスハイク」を2024年度、ようやく行うことができました。行き先は夏場から下見を重ね、山口県・下関市の角島に決定。11月、大きな観光バスを1台貸し切り、約50人が参加しました。現地では潮風をいっぱい浴び、大きな空と海の景色を味わいました。互助会にはかつて観光バスガイドとして活躍された方がおられ、毎回、ガイドを引き受けてくださいます。その名調子も健在で、車中も楽しい時間でした。



①



②



③



⑤

⑥ お助け活動

「助けられたり助けたり」。互助会員が得意なことで、お困りごとのお手伝いをする「お助け活動」をやっています。前年度に引き続き、2024年度も80代の刃物研ぎのプロが隔月で、抱樸館北九州でその技を見せてくださったほか、なかまの会のみなさんが転居後の会員宅の清掃を行いました。

⑦ 互助会葬

互助会員が亡くなり、葬儀を行う家族がおられない場合、生前の意思に沿って、互助会のみんなで葬儀を執り行います。だれが自分を看取ってくれるのか？「なかまの会」ができた背景には、様々な事情で社会的孤立に陥った自立者の切実な思いがありました。「なかまの会」が大切にしてきた葬儀は、互助会で最も大切な活動として受け継がれています。生前とともに過ごしたなかまやボランティアが故人をしのび、思い出を語り合います。葬儀には故人を知らない人も多く参列します。ともに過ごした時がなくても、精一杯生きた人生を、みんなで心に刻みます。2021年度からは、互助会に入っておられない方々のご葬儀に互助会より献花をお届けする取り組みを始めました。

※2024年度 互助会葬：10人をお見送りしました 参加者総数：のべ313名

互助会員でない方のご葬儀への参列・献花15名

⑧ 偲ぶ会

「なかまの会」では年に1度、先立ったなかまを追悼する「偲ぶ会」を開いてきました。互助会となっても、毎年欠かさず続けています。壇上に懐かしい遺影を並べ、一人ひとりの名前と没年を記した「追悼幕」を掲げます。抱樸が支援にかかわり、亡くなった方で引き取り手のなかった自立者の方々も、一緒に追悼しています。現在追悼幕には200名以上の方々のお名前が記されています。

※2024年度開催 9月19日 参加数：80名

⑨ お電話でこんにちは

コロナ禍で会えない状況が続くなか、単身独居で介護サービスの利用や抱樸の事務所への定期的な来訪がない73歳以上の会員の皆さんを対象に、お電話をかけおしゃべりする活動を始めました。

※2024年度は毎月1回活動しました。



⑥



⑦



⑧

ボランティアの声

長谷川基子さん



炊き出しの薬班を担当しています。2001年から、抱樸のボランティアとして長年活動してきました。「助けが必要な方がいて、それが自分にできることなら」と思ったことが、今も続けている原動力です。自立支援住宅の担当にもなり、ホームレスだった方が自立していく姿もたくさん見てきました。その方の人生に伴走できたことは、抱樸ならではの体験であり、喜びでもありました。日頃から、当事者の方々とは本音でぶつかり、対等な関係性を築くように心がけています。最近は活動を支えるボランティアの数が減ってきているのが悩みです。抱樸には、かけがえのない出会いがあります。ぜひ、新しい方にもどんどん参加してほしいです。

▶ 政策提言・周知活動

ホームレスを生まない社会を目指して

私たちは、目の前の方をどう支えるかと共に、ホームレスや孤立の状態にある方を生まない、誰もが生きやすい社会をつくるための活動も行なっています。その一環として、行政への提言活動や広報・周知活動に取り組んでいます。

● 政府・行政への提言

抱樸が会う方は、困窮・困難な状況に置かれており、自ら助けを求めることのできなかった方々です。その人たちに代わり、社会問題やあるべき支援を国や自治体に提言していくことが、出会ったものの責任だと考えています。目の前にいる困っている方への支援と分析・提言により、“ひとりも取り残されない社会”を目指します。

● 講演会

「ホームレスを生まない社会の創造」を目指して、困窮の現状を知ってもらうべく全国各地で講演活動を行なっています。ホームレスや生活困窮者、多重債務者、刑務所出所者に対する偏見、誤解は依然として存在します。ひとりも見捨てられることのない社会を実現するために、支援が必要な方の状況や背景を知らせていきます。

いきわらいちざ
● 生笑一座

理事長の奥田や副理事長の谷本が、野宿経験のあるメンバーと「人生」について語らいながら、ワークショップや歌などを披露する一座です。2013年の結成以来、小中学校を中心に全国で公演を行なってきました。「もう死ぬしかない、と思ったけれど、今、生きていて本当によかった。生きてさえいれば、笑える日が来る」というメンバーの“本当のことば”は、つらい思いを抱えている子どもたちに響いています。

● ほうばくチャンネル

コロナ禍により対面の講演会の中止が相次いだ2020年、「より広い層に抱樸の理念や活動を知ってもらいたい」と、5月にYouTubeで番組配信〈ほうばくチャンネル〉を開始。2024年度は、村木厚子さん（全国社会福祉協議会会長、元厚生労働事務次官）、安彦恵里香さん（Social Book Cafe ハチドリ舎店主）、松本俊彦さん（精神科医）、大西連さん（認定NPO法人 自立生活サポートセンター・もやい理事長）らをゲストに招き、20番組をお届けしました。

● 情報発信

SNSでも随時情報発信をしています。フォローや拡散のご協力をお願いいたします。



<https://linktr.ee/npo.houboku> ▶



【2024 年度の主な提言活動】
社会保障審議会生活困窮者自立支援及び生活保護部会
九州厚生局地域共生社会推進会議
研修企画委員会
社会資本整備審議会住宅宅地分科会
住まい支援の連携強化のための連絡協議会

【2024 年度の主な講演会（オンライン開催含む）】
・自治体の人権研修会、市民集会
・企業の勉強会
・イベントトークゲスト
・居宅支援協議会等での講演
・大学での講義

【2024 年度受賞】
第15回地域再生大賞「記念賞」



会計報告

2024年4月1日～2025年3月31日

科目		金額（単位：円）	
		2023年度	2024年度
I 経常収益	受取会費収益	2,492,000	2,450,000
	寄付金収益	210,247,972	250,410,486 ①
	助成金収益	5,731,067	14,470,757 ②
	補助金収益	5,174,778	8,448,631 ③
	事業収益等	221,829,981	236,220,233 ④
	受託事業収益	325,498,351	310,305,767
	雑収益／その他収益	26,406,232	29,486,539
経常収益計		797,380,381	851,792,413
II 経常費用	1 事業費		
	人件費(役員報酬含む)	319,428,538	330,942,468
	法定福利費	46,690,795	47,334,817
	福利厚生費	510,290	408,335
	旅費交通費	10,773,481	9,603,458
	消耗品費	17,623,001	16,172,418
	通信費	10,333,024	10,769,961
	水道光熱費	15,454,682	16,236,083
	賃借料	17,160,908	16,940,975
	委託費	20,841,610	17,061,646
	租税公課	26,363,009	24,355,808
	地代家賃	18,847,542	17,620,741
	給食費	13,409,029	12,627,675
	利用者工賃	8,127,325	8,654,870
	業務管理費	15,326,649	13,883,168
	講習費	10,504,050	8,603,228
	自立支援費	11,678,006	10,712,372
	支払利息	2,880,205	3,285,240
	支払手数料	8,793,764	18,583,784 ⑤
	減価償却費	17,524,753	17,707,613
	その他経費	37,355,711	34,079,938
事業費計		629,626,342	635,584,598
2 管理費			
	(1) 人件費	49,982,306	51,322,717
	(2) その他経費	221,990,202	165,215,819 ⑥
管理費計		270,990,508	216,538,536
経常費用計		900,616,850	852,123,134
当期経常増減額		-103,236,469	-330,721
III 経常外収益		35,564	130,014 ⑦
IV 経常外費用			
1 雑損失等		390,349	3,815,192 ⑧
税引前当期正味財産増減額		-103,592,254	-4,015,899
法人税、住民税及び事業税		241,000	241,000
当期正味財産増減額		-103,832,254	-4,256,899
前期繰越正味財産額		611,255,583	507,423,329
次期繰越正味財産額		507,423,329	503,166,430 ⑨

① 寄付金
2億円を超えるご寄付をいただきました。うち希望のまちプロジェクトのための寄付が約1億7,500万円ありました。また、毎月定額のご寄付をいただいている「ほうばくサポーター」は1,500人を超えています。

② 助成金
助成金として、子ども支援事業のために、福祉医療機構約700万円、赤い羽根福祉基金から約600万円などが含まれています。

③ 補助金
補助金として、国土交通省補助金約600万円などがありました。

④ 事業収益等
不動産収益、事業収益、保険料収益、出向者負担金収益の合計です。

⑤ 支払手数料
支払手数料には、希望のまちのための緊急クラウドファンディングの支払手数料が含まれています。

⑥ その他の経費
希望のまちプロジェクト建物整備のための社会福祉法人への寄付金約1億3千万円などが含まれています。

⑦ 経常外収益
経常外収益は、受取利息です。

⑧ 雑損失等
希望のまち予定地の活動拠点であった「SUBACO」を撤去したことにより、除却損約360万円を計上しました。

⑨ 次期繰越正味財産額
次期繰越正味財産額として、約5億円を繰り越しました。内訳は以下の通りです。
不動産：1.6億円
社福への譲渡金：1.8億
活用できる流動資産の繰越は1億円弱となっています。この繰越金は、炊き出し等のボランティア活動経費や子ども支援事業費など、公的支援のない活動のための資金となります。また、「希望のまちプロジェクト実施」のためにNPO法人抱樸に託してくださった寄付は、建築の状況に応じて社会福祉法人へ譲渡させていただき、『『ひとりにしない』支援』をさらに推進していきます。

応援メッセージ

* 50 音順



青野慶久（サイボウズ株式会社代表取締役社長）

生活困窮を自己責任にすることなく、社会で役割分担して支え合う活動に共感し、サポーターとして抱樸さんの活動を支援させていただいております。これからの社会においては、動きの遅い政治に期待し過ぎることなく、一人ひとりが主体的に行動することが大切だと考えています。みなさまもぜひ！



雨宮処凛（作家／活動家）

自分自身、支援活動をしながらも、本当に自分が困ったときに「助けて」と言えるかと問えば、そのハードルの高さに身がすくむ。だけど、なぜか奥田さんには言える気がしていて、そういう安心感が、みんなにとっての抱樸なのだと思う。助け合いの実践を、ともに広げていきましょう。



石原海（映像作家／アーティスト）

いままで訪れた場所でいちばんパンチの効いてた場所が抱樸の花見でした。花が散ったあとの桜なき緑に囲まれて「花見」と呼ぶその日の熱狂と愛と、そこにいる人々の存在に痺れました。そして、気づいたらアタシは北九州に引っ越していました。抱樸の活動を目撃し続けなければいけないと思ったからです。大好き抱樸、がんばれ抱樸！ これからもずっと関わらせてください。



今井紀明（認定NPO法人D×P 理事長）

孤立はいくつかの安心できる場や所属先を失ったときに起こります。孤立すると社会のセーフティネットへ辿り着くのも難しくなり、深刻な状況に陥ってしまうこともあります。そのようななかでも「希望のまちプロジェクト」は、誰もがつながりをつくることができる場所を実現していこうとしています。クラウドファンディングのときから、応援しておりました。社会における孤立をなくすためにも、このプロジェクトを応援したいと思います。



コムアイ（アーティスト）

正義と悪を決めて取り締まるようなやり方ではなく、どんな人も、誰ひとりとしてこぼれ落ちないように、やさしく強く、包み込む。日本は包容力のある社会だって自信をもって言える、そういう未来のために、抱樸の挑戦は大切な一歩です。日々のなかでそれを継続されていること、尊敬の眼差しで見つめています。



佐久間庸和（株式会社サンレー代表取締役社長）

抱樸はこれまでの「問題解決型支援」に加えて、つながり続ける「伴走型支援」へと活動の幅を広げてこられました。これはまさに“隣人愛”の実践であり、弊社が経営理念として掲げてきた“人間尊重”にも通じていると思います。今後も有縁社会の実現を目指して、同志として共に歩んでまいりましょう！



杉山春（ルポライター）

街に開かれていることの大切さ。だれもが行ける場所であることの重要性。抱樸の活動から学ぶことはとても多いです。何があっても大丈夫と思える場所を作ることとはとても難しい。抱樸を通じて、今年もまた、安心できる日常が大勢の人たちに与えられますように。



田口ランディ（作家）

抱樸の活動を見ると、人間に寄り添い続ける慈悲を感じます。新型コロナウイルスの感染拡大のなかで人と人との繋がりが見直されています。このような社会の転換点に「希望のまち」構想が立ち上がってきたことは必然でしょう。社会的なピンチを、この国の舵取りを福祉に向けるチャンスに変えてくれるこのプロジェクトを、私は心から応援いたします。



玉木幸則（一般社団法人兵庫県相談支援ネットワーク代表理事／元NHKバリバラご意見番）

最近「だれひとり取り残されない」というようなことをよく耳にしますが、ほんまですか？と聞き返したくなります。今この瞬間にも、生きづらさを感じている人やその生きづらさにも気づかないままで、一生懸命に生きている人がいっぱいおられると思います。抱樸の「希望のまちプロジェクト」が、すこしでも「生きづらさの解消」へつながっていくよう期待しています。だれもがともに生きていくことができる社会にしていけるために。



永井玲衣（哲学者・作家）

わたしは抱樸のサポーターであることが、とてもうれしいです。それは、この生きづらく、疲れ果てた社会を、抱樸が変えようとしているからです。一人ひとりに丁寧に向き合いながら、壊れた社会の流れに抗おうとしているからです。あなたと一緒に、抱樸を支えたいです。ここからこそ、社会が変わると信じています。



平田オリザ（劇作家）

「文化による社会包摂」は、すべての人にとっての「希望」です。応援しています。



平野啓一郎（小説家）

困難な時代を生きている。私たちは、自分の生活に安心が欲しくて、それを守ることに懸命になる。しかし、一人でできることは限られている。真の安心とは、困難に直面した時、この社会に救済される場所があることである。その優しさを感じられることである。そのためには、まずは今現在、苦境にある人たちに手を差し伸べなければならぬ。抱樸がその拠点となることを期待しています。



平野健二（株式会社サンキュードラッグ代表取締役社長兼CEO）

誰か自分以外の人を助けたら、まずは家族のことを思い浮かべよう。その家族が崩壊している家庭があるとしたら、社会は真っ先に手を差し伸べるべきではないでしょうか。格差、貧困、育児放棄……原因はさまざまですが、まずは前に向いて歩みだす人を支えることに、勇気と希望を差し上げたいものです。



藤原辰史（歴史学者）

激しすぎる競争社会にさらされた近代家族には、構成員全員の苦しい状態に安らぎを与えるほどの力はほとんど残されていません。だったら、その家族制度からはみ出ってしまった人たちの居場所や、近代家族を支えるようなもうちょっと緩やかで広い「家族」が必要だと、私は「緑食」という概念を用いて論じてきました。「希望のまち」はまさにそんな試みなので、応援せずにはいられないのです。



村木厚子（全国社会福祉協議会会長／元厚生労働事務次官）

これまで抱樸は、困難を抱えた人々に寄り添い、「私たちがそばにいるよ」と声をかけ続けてきました。抱樸がそうした活動を続けることができたのは、抱樸を応援してくださる応援団がいたからです。抱樸のつながる力を活かして、さらに大きな応援団を作って、ますますいい仕事をしてください。

抱樸をサポートするための3つの方法

抱樸の活動は、みなさまのご寄付によって支えられています。
支援を必要としている方々に届けるため、ぜひ財政的なご支援をお願いいたします。

① ほうぼくサポーター：1000円からのご寄付

抱樸の活動は皆さまからのご寄付によって支えられています。そこで、毎月定期的なご寄付をくださる「ほうぼくサポーター」を募集しています。初回のクレジットカード登録で、毎月定額の支援が可能です。（口座振替による登録もできます）。サポーターのみなさんには月1回、活動報告や支援現場の声をお届けする、読み応えのあるメールマガジン『ほうぼくサポーターかわら版』をお送りするほか、年1回オンライン活動報告会にご招待します。

1,000円で



炊き出し3人分のお弁当を用意できます！

5,000円で



子どもたちに学習支援を1度行なうことができます！

10,000円で



住まいを手配し、新しい生活のスタートを支えられます！

② 都度のご寄付

毎月ではなく、都度のご寄付もありがたくお受けしています。自由金額でのご寄付もクレジットカードの他、ゆうちょ銀行へのお振込みができます。

③ 遺言によるご寄付／相続財産からのご寄付

わたしたちの活動は、他人同士が会って、知り合って、支え合う「仕組み」をつくる活動です。「財産の一部を社会のために遣ってもらいたい」「遺産を相続したが、一部を寄付したい」——そのような想いを抱樸は受け止め、支援につなげていきます。しんどい状況に陥った人も、再び誰かと微笑み合える、そんな暮らしを、あなたの手で支えていただけないでしょうか。

ほうぼくサポーターやご寄付にご興味がある方は、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。クレジットカード決済のほか、郵便振替でも支援いただけます。「ひとりにしない」社会を一緒につくっていきましょう。

寄付ページ▶

www.houboku.net/webdonation



ご支援を賜っている法人賛助会員のみなさま

(2025年8月31日現在)

株式会社 l'mbesideyou

株式会社 M&M

株式会社 サンキュードラッグ

株式会社 サンレー

株式会社 新耕

株式会社 清栄

株式会社 ひまわり

株式会社 フラットアップ

株式会社 松波〈大邱(テグ)食堂〉

株式会社 山猫総合研究所

合同会社 DONOR

宗教法人 専念寺

大和証券 株式会社

ラックユニティ株式会社

* 50音順に記載しています。

抱樸に参加するための3つの方法

① ボランティア

抱樸では、炊き出しやパトロールをはじめとした、さまざまな活動へのボランティアを募集しています。北九州でのお弁当づくり、炊き出し運営、パトロールはもちろん、遠方から支援に参加される方々もいます。また、さまざまな事情で学校や塾へ通うのが難しい、小中高校生の子どもたちに、勉強を教える大学生ボランティアも募集中です。（NPO 正会員になると、個人情報の守秘義務に誓約のうえ、個々人に寄り添う活動にもご参加いただけます）

② 「互助会」に入りませんか？

互助会は、誰でも参加可能な会員制の共同体グループです。月 500 円の会費で、会員価格でのイベント参加、入院見舞金や長寿のお祝いを受けられ、互助会葬も出すことができます。ここでは、「支援する人／支援される人」という線引きはありません。「おんなじいのち」の取り組みに参加するため、遠方にお住まいの方も多くいらっしゃいます。いつでも、どなたでも歓迎します。

③ 一緒に働きませんか？

抱樸では一緒に働く仲間を募集しています。フルタイムからパートタイムの仕事まで。ご応募の際はお電話でご連絡のうえ、履歴書をご送付ください。

お問い合わせ先

Tel: 093-653-0779（平日 9:00 ～ 17:00）

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ボランティアや
求人募集については、
右記の QR コード
または
抱樸 HP をご覧ください。



抱樸ボランティアページ▲ 職員採用ページ▲

事業所一覧

NPO 法人 抱樸（代表）
〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区荒生田 2-1-32
Tel: 093-653-0779
Fax: 093-653-0779
E-mail: npo@houboku.net

ホームレス自立支援センター北九州
〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門 1-6-48
Tel: 093-563-3069
Fax: 093-581-3566
巡回相談 Tel: 093-571-1304

抱樸館北九州
〒805-0027
福岡県北九州市八幡東区東鉄町 7-11
（デイサービスセンター抱樸 併設）
Tel: 093-883-7708
Fax: 093-883-7705

ほうぼく第 1 作業所
〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門 1-4-5-2階
Tel/Fax: 093-581-0901

ほうぼく第 2 作業所
〒802-0084
福岡県北九州市小倉北区香春口 2-6-1-2階
Tel: 093-967-8995
Fax: 093-967-8996

グループホームほうぼく
〒802-0064
福岡県北九州市小倉北区片野 4-15-13
ロイヤルプラザ 1 階
Tel/Fax: 093-923-0845

日常生活支援住居施設・プラザ抱樸
〒802-0064
福岡県北九州市小倉北区片野 4-15-13
ロイヤルプラザ内
Tel: 093-922-8580

福岡県地域生活定着支援センター
〒810-0042
福岡県福岡市中央区赤坂 1-8-8
福岡西総合庁舎 2階
Tel: 092-406-7895
Fax: 092-406-7896

抱樸かわら版DX(デラックス) 2025 vol.5

編集：江田初穂（抱樸）
谷瀬未紀（抱樸）
藤井陽子（抱樸）
北條みくる（抱樸）
デザイン：千原航
発行日：2025年9月30日
発行者：認定NPO法人 抱樸
〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区
荒生田 2-1-32

2024

